

明日への挑戦、佐渡演習林

私が森林生態部長(旧演習林長)として佐渡島に赴任したのは、平成20年4月のことでした。これまで佐渡のイメージは、金山と朱鷺ぐらいで、森林はすでに利用し尽くされた二次林程度のものと考えていました。しかし、様々な情報を集めてみると、高樹齢のスギ天然林が演習林の核をなしていることがわかつてきました。そして実際に佐渡演習林に来てみると、演習林がある大佐渡の尾根沿いには、普通のスギの樹形とは程遠い、曲がりくねった老木が森林を形成していました。枝がマンモスの牙のように曲がりくねって、それが地面に接して、そこから発根し、新たな幹を形成しているように見えました。冬の積雪と強風によって作り出されたこれらの奇妙な形態の天然スギは世界遺産の屋久島の天然スギに匹敵するを考えています。また、スギ天然林の林床植生の豊かさにも驚きました。本州ではニホンジカの食害により広域で植生が変化していますが、佐渡島では林床に希少植物を含めて密度の高い植物相が繁茂しています。特に、フクシユソウ、カタクリ、オオミスミソウ、シラネアオイなどの春植物の豊富さは圧巻です。佐渡島は冷温帯のブナが優占する植生帶にありますが、演習林のある地域ではスギが優占しています。島全体の植物分布を相観すると、小佐渡の海岸地帯にはタブノキやウラジロガシなどの常緑広葉樹林が分布するとともに、ハクサンシャクナゲやオサバグサなど亜高山帯の植物も分布しています。また、植物の分布と標高や地形との対応が曖昧で、本州では、高標高に分布しているハクサンシャクナゲが海岸近くまで分布していたり、海岸植生のハマナスが尾根沿いに咲いていました。水辺林に分布するサワグルミが尾根に分布し、アカマツが沢に分布するなど地形との関係も本州と異なっています。これらの興味ある現象は、歴史的な佐渡島の形成過程や、自然環境そして人間による森林の利用と関係していると考えています。このような、多様性のある自然是、教育資源として重要であるだけでなく、研究対象としても価値あるもので今後の利用が期待されています。



初夏、咲き乱れるシラネアオイ

ここ10年ほどの間に、佐渡ステーション(佐渡演習林)は、これまでの姿から大きな変貌を遂げてきました。そのきっかけの一つは、写真家天野尚氏の写真によって、演習林の天然スギが世間に脚光をあび、天然スギを中心とした佐渡演習林の森林生態系の多様性が再認識されたことです。このころから演習林への入林は、森林の多様性を保全するために新潟大学が養成したガイドの案内によるエコツアーに限定して行われるようになりました。二つ目は、平成24年の文部科学省の教育関係共同利用拠点の認定です。毎年、全国の多くの大学から、農学部以外の分野の学生が演習林に来るようになりました。実習の形態も様々で、これらの実習の引率教員を講師とした一般公開の「佐渡ゼミ」をこの4年間で20回程度行っていました。

今後の演習林は、教育関係共同利用拠点の再認定を目指しながら、グローバルな教育・研究活動を行っていく予定です。特に、東アジアの国々と共同実習を展開していく計画を立てています。また、将来的には理学部附属臨海実験所、朱鷺・自然再生学研究センターとの連携を強化し、流域レベルでの森里海実習を充実させて行きます。これらの教育を充実させて行く一方で、佐渡島という島嶼環境を生かした演習林の研究力のアップを目指していきたいと思います。今後とも、皆様の御支援をよろしくお願いいたします。

(フィールド科学教育研究センター佐渡ステーション 教授 崎尾均)

共同利用実習募集中!

佐渡ステーションでは、共同利用実習や演習林での調査・研究の受け入れを随時行っています。お気軽にご相談ください。

実習の様子などをブログで紹介しています [佐渡研究室](#) [検索](#)

新潟大学演習林ニュースレター
編集・発行: 新潟大学農学部フィールド科学教育研究センター 佐渡ステーション
〒952-2206 新潟県佐渡市小田94-2
tel: 0259-78-2613 fax: 0259-78-2929 e-mail: sadoken2011@gmail.com
ホームページ http://www.agr.niigata-u.ac.jp/fc/sado_html/sado_index.html



崎尾均 教授



新潟大学演習林ニュースレター
Niigata University Forest Newsletter

新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター 佐渡ステーション

第3号(60周年記念特別号) 2015年10月

佐渡演習林60周年を迎えて

農学部附属佐渡演習林(現在のフィールド科学教育研究センター佐渡ステーション)は、昭和30年(1955年)に設立され、本年60周年を迎えることになりました。新潟大学50年史をひも解くと、創設期のさまざまな困難を乗り越え、昭和50年代には演習林の体制が整備され、経営が安定してきた様子がわかります。さらに、平成元年には、設立以来の大事業であった大倉川から黒姫林道に至る周回路林道を完成させています。その頃から、演習林の母体であった林学科が改組により解体され、林業を取り巻く大きな社会情勢の変化、農山村の過疎化、高齢化などに対応する厳しい時期を迎えるようになり、反面、現在につながる環境保全や災害防止などの問題が一層重要性を増してきました。このような複雑な課題に対処するには、フィールド科学という総合的な視点が必要になってきました。こうして、平成13年(2001年)には、農学部附属農場と統合することにより、フィールド科学教育研究センターが設立され、森林生態部(佐渡ステーション)として、学部教員との緊密な連携のもと農学部の教育研究活動、地域連携活動に取り組むようになりました。



山田宣永 教授

現在、佐渡ステーションは、農学部教育および森林科学研究を実践するうえで不可欠な重要な役割を果たしていることは言うまでもありません。平成24年(2012年)には、文部科学省の教育関係共同利用拠点に認定され、新潟大的学生に加えて全国の大学から学生を受け入れて多くの実習を開催しています。さらに、理学部附属臨海実験所、朱鷺・自然再生学研究センターと連携した分野横断型の教育研究も展開しています。佐渡ステーションの天然林は、環境省の生物多様性モニタリング事業や Japan Long-Term Ecological Research のサイトのひとつとして研究面で重要な価値を持つとともに、佐渡島の最も自然度の高い森林として一般にも広く知られています。このような豊かな自然環境を利用した佐渡ステーションは、今後も、農学人材の養成や基礎的応用的両面からの幅広い研究に多くの期待を抱っています。

(フィールド科学教育研究センター センター長 山田宣永)

佐渡演習林60周年記念式典の開催

新潟大学佐渡演習林(農学部附属フィールド科学教育研究センター佐渡ステーション)は、昭和30年に開設され、本年60周年を迎えました。この間、地方の小規模演習林ならではの色々な困難な道のりがありました。それらを乗り越えてこられたのは、ひとえにこれまで演習林を利用して教育研究をしてこられた皆様のお陰です。つきましては、これまで当演習林に関係してこられた方々への感謝の意を込めて、10月3日(土)に60周年記念式典を開催させて頂きます。60年は人生では還暦ですが、日本で最も古い演習林に比べればまだ半分ほどのひっこです。これからも、末永く、お付き合いのほどお願い申し上げます。



本間航介 准教授

(フィールド科学教育研究センター佐渡ステーション 准教授
佐渡演習林 60周年記念式典実行委員長 本間航介)

佐渡演習林60年の歩み

- 江戸年間 幕府直轄地として佐渡奉行が管理
- 明治初め 明治維新の際、旧幕府直轄地は国有林になる
- 1890(明治23年) 佐渡鉱山の帝室財産化に伴い、島内の国有林6,846町歩(約6,789ha)が御料林となる
- 1924(大正13年) 御料林の内3,575町歩(約3,545ha)が新潟県の所有となる
- 1949(昭和24年) 新潟大学農学部発足
- 1951(昭和26年) 農学部附属演習林を設置(中ノ沢演習林:東蒲原郡三川村、借地)
- 1955(昭和30年) 新潟県議会において、佐渡県有模範林の一部(約500ha)を新潟大学農学部へ無償譲渡する議案が可決(1960年に正式な譲渡手続が完了)
- 新潟大学農学部附属佐渡演習林発足**
- 1958(昭和33年) 新潟県より演習林宿舎が譲渡される(旧相川町大倉)
- 1964(昭和37年) 新潟大学農学部演習林報告を発刊
- 1989(平成元年) 林道全線(大倉ゲート~岩谷口ゲート)開通
- 1991(平成3年) 台風19号による大規模な風倒木被害が発生
- 1992(平成4年) 旧相川町大倉から旧相川町小田(現佐渡市小田)小学校跡地に研究・宿泊施設を移転(新施設は、1996年に落成した)
- 1993(平成5年) 演習林報告を第26号より「演習林研究報告」に改名
- 2001(平成13年) 農学部附属演習林および附属農場が統合・発展的改組により農学部附属フィールド科学教育研究センターを設立
企画交流部(新設)、耕地生産部(旧農場)、森林生態部(旧演習林)の三部門体制へ移行
新潟大学農学部演習林研究報告第34号を最後に休刊
- 2002(平成14年) 新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター年報を発刊



1989(平成元年) 林道全線(大倉ゲート~岩谷口ゲート)開通



林道全線開通を記念し、学長や農学部長を招いて記念式典や祝賀会を行った(前列中央が当時の津田学長、その左が治部田農学部長)
演習林の生み、育ての親の豊島先生(真中)、林道設計に貢献した山本先生(右)、演習林の教員であった中田先生(現農学部教授)(左)

1991(平成3年) 台風19号による大規模な風倒木被害が発生



この頃、素材生産も盛んであり、直径1m以上の大型木の切り出しも行われていた
→
切り出した木材は市場に出されたが、中にはテーブルなどに加工し
演習林宿舎や農学部に設置された

1992(平成4年) 旧相川町大倉から旧相川町小田(現佐渡市小田)小学校跡地に研究・宿泊施設を移転
(新施設は、1996年に落成した)



旧小田小学校
施設の建築は第1期~第4期に分け、閑散期の冬に行われた



着工から4年間かけて完成した新しい研究・宿泊棟(左)
当時の学長、学部長らによって、敷地内で記念植樹が行われた(右)

1993(平成5年) 演習林報告を第26号より「演習林研究報告」に改名

2001(平成13年) 農学部附属演習林および附属農場が統合・発展的改組により農学部附属フィールド科学教育研究センターを設立

企画交流部(新設)、耕地生産部(旧農場)、森林生態部(旧演習林)の三部門体制へ移行

新潟大学農学部演習林研究報告第34号を最後に休刊

新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター年報を発刊

- 2003(平成15年) 新事務棟(ログハウス)を同敷地内に新築

 新事務棟は研究・宿泊棟前の駐車場であった場所に建築した
- 2004(平成16年) 環境省 モニタリング1000のコアサイトに登録
- 2008(平成20年) 日本長期生態学研究(Japan Long-Term Ecological Research)ネットワーク(略称JaLTER)の準サイトに登録
 演習林の天然スギ林が佐渡エコツアーハイウェイ「原生林と杉巨木群トレッキング」(佐渡エコツアーガイド協会開催)
- 2012(平成24年) 文部科学省教育関係共同利用拠点に認定

 全国の中大から学生が集まる共同利用実習では、森林観察のみでなく、佐渡島の多様な自然環境を活かし多岐に渡る実習を行っている
- 2013(平成25年) 佐渡ステーションの周辺地域の方達を招いた山開きの開催、地元の文化祭への出展など地域交流に盛んに取り組み始める

 佐渡ステーションを紹介するポスター(佐渡市主催「環境フェア2013」にて)

 文化祭での木工品の展示、販売

 大勢の関係者や周辺地域の方が参加する山開きの懇親会
- 2015(平成27年) 新潟大学佐渡三施設の、佐渡ステーション、朱鷺・自然再生学研究センター、理学部附属臨海実験所定期的な合同シンポジウムを開始
 小田集落の梶井邸(所有者、出澤氏)を借りて宿泊・セミナー施設「梶井ハウス」をオープン
佐渡演習林60周年記念式典を開催

佐渡演習林教職員、学生の研究・技術活動

現在、佐渡演習林は教育関係共同利用拠点の認定など、教育活動が非常に注目されています。一方で、長年、学術研究や森林管理の技術振興も盛んに行ってきました。この十数年を振り返っても、技術職員の第7回全国大学演習林協議会森林管理技術賞(中山, 2005)、第17回全国大学演習林協議会森林管理技術賞特別功労賞(谷口, 2015)などの受賞や教員の第16回尾瀬賞(崎尾, 2013)、第1回新潟大学学長賞(若手教員研究奨励)(阿部, 2014)などの受賞があり、その活発な活動ぶりが伺えます。学生も研究活動に邁進しており、第57回日本生態学会大会優秀ポスター賞(川上ら, 2010)、第58回日本生態学会大会優秀ポスター賞(大野ら, 2011)、第62回日本生態学会大会最優秀ポスター賞(宮島ら, 2015)の受賞など目覚しい成果を挙げています。



溪畔林の生態と管理の研究により、第16回尾瀬賞を受賞した崎尾教授

佐渡演習林60周年によせて

新たな価値観

フィールド科学教育研究センター佐渡演習林60周年、おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。私は平成8年10月から平成11年9月までの3年間弱、当時相川町であった小田に常駐する助手として勤務させていただきました。今では、多くの先生方が佐渡市小田に常駐され、教育・研究にまい進されております。しかし、その時が佐渡演習林に教員が常駐するはじめてでした。そのため、採用時の学部長であった小島先生や学科長、後の演習林長の竹内先生をはじめ、たくさんの関係の皆様に支えていただきました。特に、演習林職員であった山口さん、矢部さん、中山さん、平野さん、そして今もがんばっておられる谷口さん、川嶋さんには本当にお世話になりました。私が佐渡でなんとか常駐の任を果し、次に繋ぐことができたのは、職員の皆さんが演習林業務をきちんと底支えてくださっていたからです。今でもその状況は変わらないでしょう。これらの皆様に、あらためて、この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。



箕口秀夫 教授

佐渡演習林といえばあの屋久島にもひけをとらない天然杉が世に出、多くの見学者を感動させてやまない森林として認知されています。しかしあの須スギ天然林は、まだまだ知る人ぞ知るという存在どころか、伐ることもできないということなどから演習林の厄介者といった印象すら持たれていました。そんな折り、いつものように職員の皆さんが準備して下さった佐渡山海の珍味を愉しみながらの四方山話で天然林の話になりました。せっかくのあの天然林を積極的に活かすことはできないだろうかという話になったのです。価値観の転換です。その後、大王スギや蛸スギを中心とした巨木群を観察できる王様の小径などが開設され、少しずつですが、演習林のあらたな存在価値がじわじわと広がってきたように思います。わずかな間でしたが私が佐渡で得たものは、現状を受容して活かしていく覚悟という価値観だったのかもしれません。

満月の夜、Z坂からみた岩谷口海岸・閑岬の風景を今でも忘ることはできません。同じように忘れない風景が佐渡演習林や佐渡島にはたくさんありました。そして、目に焼き付いた風景と同じように、忘れないもの、そしてかけがえないものが演習林にはあります。多くの皆さんが演習林を訪れ、あらたな価値観に気づくことを佐渡演習林のますますの発展とともに期待しています。

(農学部生産環境科学科 教授 箕口秀夫)

2つの教育共同利用拠点の連携と発展を目指して

フィールド科学教育研究センター佐渡演習林が60周年を迎ましたことを、心よりお喜び申し上げます。佐渡演習林から車で約30分の場所、達者海岸に位置する理学部附属臨海実験所は1954年に設置され、演習林と同じく60年に渡って、佐渡島の豊かな自然環境と生物相を利用した教育研究を行ってきました。臨海実験所の教育研究は、海洋生物の多様性と歴史性についての理解を目的としたのですが、海洋の生物や環境は、川を通して里や森林とつながっています。その連続した生態系全体の中で、生物の動きや物質の循環を理解することが海洋の生物や環境を理解する上でも重要です。佐渡島には、新潟大学の3つのフィールド教育研究施設、すなわち演習林(森)、朱鷺・自然再生学研究センター(里)、臨海実験所(海)が近距離に位置しており、まさに森から海をつなぐ生態系を総合的に理解するための、全国無二の教育研究の場があります。3施設が連携したフィールド教育プログラムをこれまでにスタートさせていますが、今後大きく展開させていきたいと考えています。とくに、2012年の佐渡演習林の教育関係共同利用拠点の認定に1年遅れて、臨海実験所も「離島生態系における海洋生物多様性教育共同利用拠点」に認定されました。



安東宏典 教授

この佐渡島の2つの教育共同利用拠点間の連携を強化し、発展させていくことで、将来的に佐渡島を世界的な生態学教育研究モデルの地としていきたいと考えています。大佐渡山脈に残されたスギ原生林を中心とした佐渡独自の森林生態を活かした教育研究施設である、佐渡演習林の益々のご発展をお祈りいたします。



佐渡市達者の臨海実験所

(理学部附属臨海実験所 教授 安東宏徳)

佐渡演習林での野外実習

佐渡演習林開設 60 周年を心からお祝い申し上げます。また、演習林の運営に日々尽力されている崎尾均さんをはじめ全ての教職員の皆様に深く感謝します。

私たちも首都大学東京の生命科学コースは、2004 年 8 月から佐渡演習林にて、生態学野外実習を実施させて頂いています。本年の 8 月にも、阿部晴恵さん、菅尚子さん、柳屋喜和さん、平越高弘さん、本間大也さん、川嶋一二三さん、石塚しおぶさんとの協力により、12 回目の実習を無事終えることができました。

佐渡演習林に野外実習を受け入れていただくようになった経緯は、東京都立大学（当時）の実習施設廃止が決まった 2002 年にさかのぼります。その決定を受け、新たな実習地として佐渡演習林の利用を、箕口秀夫さんや本間航介さんに打診しました。大学演習林の多くが消極的だった他機関の受け入れを、佐渡演習林では、検討、決断していただきました。とくに本間さんには、各所との折衝など非常にお世話になりました。

実習で初めてお邪魔した 2004 年には、中山昇さん、山口善弘さん、谷口憲男さんに演習林の特徴や利用のルールを教えていただきました。この年は、アサギマダラが非常に多く、車が通ると雲が湧くように蝶が群れ飛んだことが強く印象に残っています。それ以降も、濱田栄一さん、三浦慎吾さん、中田香玲さん、五十嵐彬子さんらに助けていただきながら、実習をさせてもらっています。実習の内容は随時変更していますが、佐渡演習林の大きな魅力である林床・林縁の植生の豊かさを利用した、草本や木本実生の種の共存・排他的空間分布解析は、必ず行っています（写真）。宿舎では小雨だったので入山したところ、山では凄まじい豪雨で、気象観測塔まで行って車外に出ることもなく下山した年もありました。

佐渡演習林の素晴らしい特徴は、学生へのきめ細かい配慮と徹底した安全対策です。弁当の保冷や熱中症対策、学生の体調不良への迅速な対応など、とくに技術職員の皆様のおかげで、安心して実習に取り組むことができます。重ねてお礼を申し上げます。

佐渡演習林で実習をさせていただいた期間は、思えば、日本中の大学が大きく変化を迫られた期間に重なります。多くの施設が人員や予算の削減により、その活動を縮小していく中で、佐渡演習林は充実の一途をたどっているように思えます。さらに、その役割は、新潟大学の枠組みを超えて、ますます大きくなっています。学外の利用者の一人として、これまでの演習林のご貢献に深謝するとともに、今後のますますの発展をお祈りします。

（首都大学東京理工学研究科 准教授 鈴木準一郎）

佐渡演習林と歩んだ13年半

佐渡演習林の設立 60 周年おめでとうございます。私は 2000 年 10 月から 13 年半演習林にお世話になりましたが、演習林に来るきっかけとなった日のことは今でも覚えています。研究室配属の前に、興味を持っていたつる植物の研究ができるかを多くの先生方に聞きたいと思っていたため、最初に本間航介先生に尋ねたところ、いろいろな質疑応答を経て、予定外にその場で卒論のテーマが決まったのです。あまりにも急だったため多少の戸惑いはありましたが、つる植物の研究ができることへの喜びが大きかったのを覚えています。

それからの佐渡での生活はとても濃い日々でした。思い出すのは、支えてくれた先生方、技官さん、集落の方々のやしさと、たくさんの辛い日々です。当時の研究室は廃園の矢柄保育園だったので、赤茶色の水が出る、インターネットはつながらない、ネズミが走り回る、虫が飛び交う環境の中で生活することになりました。さらに、本間先生の夜間引っ越し作業（傍目には不審に見えるので、警察に事情聴取された）、大倉川に車ごと転落しかけた事件、樹木園スーパーハウスで凍死するかと思った事件、路面凍結によるスリップで達者の壁に激突事件など、話のネタには困らないほど多くの経験をしました。2003 年には、演習林にログハウスが建ち、快適な日々を過ごせるようになりました。

本間先生の熱心なご指導のもと、なんとか博士号を取得できたわけですが、さらに 2 年半は演習林の技術補佐員として、4 年半は朱鷺・自然再生学研究センターの助手として演習林にお世話になりました。技術補佐員時に技官さんからチェーンソー・バッカホーの運転技術を教えていただけたことは、現在の職場においても、ビオトープ造成や倒木の除去作業を依頼されるなど大変役立っています。また、農学部の後輩と縁あって結婚し、2 人の子供にも恵まれ、



野外実習の様子

幸せな家庭を持つことができましたが、最初の出会いが演習林での FC 実習というように、まさに私の人生は演習林なくして語れないものとなっています。

2015 年 1 月、私が演習林を離れた翌年、演習林のブログにはとても楽しみなことが書かれていました。今年からは「グローバル化」を課題として挑戦していくという内容です。13 年前には全く想像もできなかったことですが、演習林が見る間に大きく発展していったように、さらなる飛躍を遂げられることを期待しております。

（福岡県保健環境研究所 金子洋平）

30 年間の山仕事

30 年間、山の仕事一筋の技術専門職員の谷口さんに山での心得、演習林の変遷などについてインタビューしました。

— 谷口さんは主にどのような仕事をしているのですか？ —

春先は、約 15 キロある演習林の林道の除雪作業を行っています。ここ数年は、雪が少ないので仕事量的には楽な反面、肉体的に厳しくなっていますが、4 月終わりの山開きまでの全線開通を目指し、行っています。

4 月以降は、演習林での実習、調査などの対応が主な仕事になっています。車両の運転の他、林道の整備にも当たります。演習林の林道は、ガードレールも無く、作業道に近い物です。林道の手入れを怠ると、直ぐに草が繁茂し、通行が難しくなります。これらを 100 パーセント管理するのは不可能ですが、誰が運転しても崖から落ちない様に、道幅の確保や雨などで抉られた道の整備を行い、安全に走行できる林道の維持に努めています。

— 最近では、冬場に木工品の製作も行っている様ですが、いかがでしょうか？ —

約 20 年前に、冬場に木工品を作ったら・・・という話しが出て、試行錯誤を繰り返してきました。最近では、崎尾先生達の協力で新しい作業機械をそろえることもでき、本格的に作製できるようになりました。材は、山の整備のために切り出したものの、使い道の無い木材を利用しています。

春先は、度々、雪解けによる崩土が起こり、林道は通行止めになる

— 佐渡ステーションに勤めて 30 年ですが、振り返っていかがですか？ —

2006 年、研究室にて



私も今年は節目の年です。非常勤職員として佐渡ステーション（当時：演習林）に勤めはじめ、最初は、慣れない仕事をかりでしんどかったです。何度も辞めようと思いましたが、それでも、これまで続けられてきたのは、この仕事が根っから好きな事が大きいと思います。

最初のころは、山の手入れが主な仕事でした。人間が一度手を加えた場所は、山で仕事を行う、若き日の谷口さん後々まで面倒を見る必要があります。当時は、人手がいる春から秋にかけては、地元の女性を雇い（多いときで、十数人くらい）山の手入れを行っていました。素材生産も盛んで、その収入が演習林の財政を支えていたときもありました。今では、林業の衰退に伴い、山の手入れに比重を置くのは難しくなっていますが、当時植栽した木の手入れは、節目節目に進行必要があります。その作業が今は十分にできなくなっていることが、もどかしく感じます。

— 山で仕事をする上で、心がけていることはありますか？ —

もちろん、安全第一です。怪我は、場合によっては自分だけでなく、周りにも迷惑をかけることがあります。仕事は複数で行なうことが多い、自分が大丈夫と思っていても、他の人と上手に息を合わせなければ、怪我につながる事故の要因になります。仕事前には一息入れながら打ち合わせをし、疲れている時には無理はしないという事を心がけています。

— この 30 年間で印象深い出来事はありますか？ —

はじめて、このインタビューを受けたことかな（笑）。いろいろありますが、これまで体がよく持ってくれた事です。でも、明日にでも大怪我をする可能性はありますので、日々、安全第一で仕事を行いたいと思います。

— 今後力を入れたい仕事はありますか？ —

退職まであと数年しかないので、自分の植えたスギを最後まで見守りたいという事と、自分の学んだことを後の人伝えが最後の仕事だと思っています。演習林が長く、100 年 200 年と続くような仕事を残したいと思います。

（インタビュー：フィールド科学教育研究センター佐渡ステーション 技術専門職員 谷口憲男）